



日本洋書協会

JAPAN ASSOCIATION OF INTERNATIONAL PUBLICATIONS

November 2015
REPORT MAGAZINE

会報誌 | vol. 49 no. 6

Published by JAIP 1-32-5 U.S.P Higashishinagawa Shinagawa-ku, Tokyo 140-0002

Call:03-5479-7269 e-mail:office@jaip.jp

理事会報告

理事会 2015年11月4日(水)

出席(敬称略) 相澤、松村、細谷、小松崎、東端、(総務委員長・事務局)

1. 推薦理事の選定(再)

トムソン・ロイターの深町氏に依頼することとした。
→深町氏から受諾の連絡あり。

2. 事務所移転経費の対処

一時費用の引越(什器運搬)約7万円、ゴム印約1万円は予備費から、封筒印刷約8万4千円は事務用品費で計上、以下の費用、定期代約7万5千円(半期)は通常の交通費、事務所家賃5万円(月)は事務局運営費で計上する事とした。したがって一部の費目は決算時に予算を上回る。

3. 入会審査

・一般社団法人学術著作権協会の入会を承認した。

4. 理事長から

・10月6日に理事長と事務局長がUPS社の深

田会長を訪ね、業界の混乱に対し善処するよう申し入れた。深田氏は了解し、後任に引き継ぐ旨返答を得た。

・雄松堂新田氏ご逝去の件 12月7日雄松堂書店社葬、丸善は予定無し。

5. 委員会報告

・文化・厚生：定例のボウリング、新年賀詞交歓会は決まっている。他のアート、グルメ、スポーツ、文化など具体化していきたい。

・広報：会報11月号の編集に入っている。

・総務：今月の委員会で、先の消費税関連の意見交換を行う。

・事業：今月TIBFの実行委員会が書協である。事務局が参加予定。

6. その他

・細谷理事から10月20日に行われた「出版物への軽減税率の適用を求めるシンポジウム」に参加した。資料が有るので一読願いたい。

関西懇親パーティー

2015年の関西懇親パーティーは9月11日(金)に大阪第一ホテルにて盛大に行われました。

今年は12社33名の方にご参加いただきました。6時過ぎより司会の開会宣言の後、相澤理事長よりご挨拶と乾杯のご発声をいただいてパーティーは進みました。

一年ぶりのパーティーということで皆様それぞれに会話が弾みお酒も食事も楽しんでいらっしゃいました。

あっという間に時間は過ぎ、中締めは個人会員としてのご参加のグレシャム氏にいただき閉会となりました。

来年も盛大なパーティーを開催できることを願っております。(RT記)



「2015 Frankfurt Book Fair」 見聞録

ドイツ・フランクフルトで10月14日から開催されたブックフェアに初めて参加しました。

事前にこのフェアは世界最大規模であるとの情報を得ていましたが、実際現地に到着するとその規模に圧倒されました。国内の展示会などでは1つの会場を借り切り、大きなブースいくつかと中小ブースが四角い通路を描くように並んでいることが多いと思いますが、フランクフルトではその会場並みの大きさが10ホールもあり、その1つ1つにブースがギッチリと、掲示された地図の文字が見えないくらいのスペースで詰め込まれていました。

会場の活気も国内のそれとは違い、開場前からエントランスの改札には訪問者が押しかけており、定刻と同時にそれぞれのホールへ足早に進む人の波ができていました。

今回の我々の目的は、学術出版系の出展者が集まるホール42でのミーティングだったのですが、そういった目的の参加者が世界中から集まっているようで、大小問わずどのブースも椅子とテーブルが用意されており、さながらミーティング博覧会のような様相を呈していました。

またブースを持たない参加者は、ホール内外のカフェやレストランで席を取るか、中には壁や手すりに寄りかかって立ったままミーティングを行っていました。

そのような、悪く言えばラフな、良く言えばフランクな形式での対外ミーティングは経験したことがなかったので非常に新鮮な驚きを覚えたとともに、フ

ランクフルト・ブックフェアの“名”だけではなく、人があふれるほどの求心力と伝統を持つという“実”の面でもそのパワーを実感しました。

また大出版社や学会だけではなく、業界進出を狙う新規データベースやサービスも売り込みのために出展しており、胸に名札を付けていた私は何回か呼び込まれることがありました。

ミーティングを行った方などによると、ブックフェアは年々縮小しており、新規サービスもパッとしたものがないとのことですが、そのような雰囲気は微塵も感じないほど会場全体が活気に溢れていました。

展示会は毎日午後5時30分まで開かれているのですが、夕方4時頃になると小ブースから人が引き始め、ホール入口近くの大企業ブースに集まり始めます。不思議に思い覗いてみると、どこからともなくワインやビール、菓子・おつまみが運び込まれ、宴会のようになっていました。時間が進むにつれ他のブースは開店休業状態となり、出展者も参加者も満員電車並みの混雑度の中、歓談を楽しんでいました。

帰国寸前わずかに空き時間ができたので他ホールを回りましたが、「ブック」だけではなくビデオ、教材の展示やなぜか料理教室まで行われていて、あらゆる文化の集合体であるような印象を受けました。国別に分かれた出展スペースもあり、日本のブースには株式会社小学館や株式会社講談社などの著名な企業が軒を連ねており、見学者も複数いましたが、ブース全体の規模は中国・韓国などの他のアジア各国より少し目立たないように感じました。

広大なブックフェアの会場全てを数時間で見学することは叶わず、駆け足で回るだけとなってしまいましたが、それでもフェアは魅力的で、プライベートでも訪れたいと思わせられました。

将来、もし機会があれば、再度参加してみたいと思います。

(ユサコ株式会社 リサーチ・アシストグループ 和泉 孝弥)



2015年フランクフルト国際図書展示会に参加して感じたこと

最初に、今年のフランクフルト国際図書展示会の入場者数を見てもらいたい。

出版社関連来場者:140,474人(昨年140,291人)

来場者総合計:275,791人(昨年269,534人)

2009年以来毎年下降傾向であった入場者数は、今年はずかだか上昇している。Publishers Weekly 10月19日付の記事によると、この上昇は、“世界の出版界において連帯感が生まれている、新しいビジネスエリアに目が向けられた”ことを意味しているらしい。

入場者数が増えたのは喜ばしいことであるが、その新しいビジネスエリアとはいったいなんのことなのか、この記事には詳しく書かれておらずよくわからない。実際、会期中に会場を見て回ってはみたが、かつて電子書籍が登場したときのような強烈な新しい何かは感じられなかった。電子書籍でさえ会場ではすでに影が薄くなった感がある。

ただ、いまさら言及するまでもないが、ざっと会場を見て回って感じたことは、電子書籍とリアルブックのそれぞれの役割がほぼ確立したということである。電子書籍は、もちろん個人読者の利用もさることながら、図書館や研究者など機関向けに学術情報を配信するサービスとして、または貴重資料の保存という意味でのデジタル化として、一層利用される方向にある。それに対しリアルブックは、電子では表現しきれない世界、例えばアート本や特異なサイズの本、また文字のものであっても装丁の美しさ、用紙や印刷の質感、そこにたずさわる編集者をはじめとする様々な人々の試行錯誤などとコンテンツ自体がもつ力が一体となってひとつの世界を作りだしており、それは電子では表現しきれない。原書のもつ力は量り知れないのだ。

そう考えると、今後のリアルブックの存在価値は、これまでとは異なるものになるだろう。たとえば保存を目的としてデジタル化している貴重書なども、原書のもつ世界観まで残すことを目的とするのであれば、原書を中実再現した本の形（復刻版・ファクシミリ版）として保存することにもこれまでより高い価値が見出されるように思う。また、1冊の本の世界を作りだすための企画立案、著者や編集者の力量、多種多様の用紙、印刷技術、製本技術、装丁デザイン、など、これまでよりも一層高いレベルが求められるようになっていられる。

そういう観点から考えると、前述の“新しいビジネスエリアに目が向けられた”という記述にもうなずける。世

界の出版界が上に記したようなことに気付き、連帯感をもって、新しい電子の世界、新しいリアルブックの世界を構築してゆくことに大いに期待したい。

全く別の件で感じたことを書くと、シンガポール、マレーシア、韓国、中国、インドネシアなど、国をあげて自国の著者の版權を売る目的（著者の顔写真も大々的に貼りだしている）で出展している大きなブースに比べ、日本ブースが集まるエリアは見劣りがした。日本から出展している約30社のうち、半数はそれぞれの専門分野のホールに独立出展しているため、日本ブースが集まるエリアが縮小気味であるのは確かである。一昔前のように、日本の出版社が一体となってフランクフルトに出展しなくとも、現在は各々が担う役割を個々で遂行している。ある意味、成熟した感がある。

しかし、東京オリンピックを目前にひかえた我が国では、自国から海外への正しい情報発信の必要性が叫ばれ、関連事業やイベントに政府からも種々の助成金や補助金がだされていることを考えると、世界一の図書展で自国のプレゼンスをもっとわかり易く魅力的にアピールすることは大変重要だと強く感じた。

私が現地で打ち合わせたオランダの出版社の女性から、「日本はなぜ世界に向けて英語の出版をしないのですか？日本にはおもしろそうなコンテンツがたくさんあると聞いているけれど、日本が何を出版しているのか、私たちはまったく知らない。」と素朴な疑問を投げかけられた。自国語に加え英語で出版した商品を世界中に販売し、また同じように英語で出版している他国の出版社の商品を仕入れて販売するのが当たり前になっているオランダの出版人にとって、日本の出版界がほとんど日本国内市場だけをターゲットにして完結していることが、とても不思議に感じたようだ。フランクフルトのような国際図書展に参加して、回りを世界中の人々にかこまれると、この女性の疑問が至極あたりまえのように思える。

私個人としては、今回のフランクフルトへの参加は、自国の文化を海外に広めるひとつの手段としての出版活動、それが電子であれリアルブックであれ、をあらためて見直す良い機会になったと感じている。今後、何かの形でこの分野に少しでも貢献がしたいと切に感じている。

(株式会社雄松堂書店 松野夏生)

我が社・わが街

第2回 本郷(1)

株式会社 友隣社

前代表取締役 上原 鉄男

本郷三丁目交差点の角にある“かねやす”という雑貨店には、“本郷もかねやすまでは江戸の内”という川柳が掲げられている。これは江戸時代、火災を恐れたため江戸城からこのかねやすまでは瓦葺の防災建築が許されたことに因るものでそんな川柳が広まったらしい。

我が社がそんな時代から凶書の輸入を始めたわけでも無く、本郷地区においても我が社は後発組に入ると思う。それでも昭和35年(1960年)和文書を海外の研究機関などに売る業務を始め、後に理工学書を輸入、販売する部門が加わり、現在は数学書の専門店として営業を続けている。

今から55年も前の昭和35年といえば、2月には今の浩宮皇太子が生まれ、日本社会党の浅沼稲次郎さんが刺殺されるような事件もあった。書籍では北杜夫さんの「ドクトルマンボ―航海記」や謝国権の「性生活の知恵」がベストセラーでラジオからは水原弘の「黒い花びら」や西田佐知子の「アカシヤの雨が止むとき」などが流れていた。会社が移転した当時はまだ前の本郷通りは都電が走っており、朝地下鉄の駅を出て会社に遅刻しそうな時は都電に乗るかそれとも走るか迷ったのも懐かしい思い出だ。

そんな時代背景の中でも本郷の街は何時も伝統を守りながら新しい社会の息吹を受け入れ続けてきたように私は思う。

縄文時代には近くの上野・不忍池は入り江であり、大小の谷に刻まれた坂の町が本郷でその頂上が東京大学であると本で読んだ。そんな地形がどんな文明・文化を育てていったか知らないが、まずは文豪の町本郷から書いてみる。普段は意識することは無いが会社より歩いて数分の東大には夏目漱石の小説で有名な三四郎池があり、樋口一葉の菊坂旧居跡も近い。我が社が入っているビルも元は大野屋という旅館で森鷗外の小説にも書かれているという。明治から昭和にかけて本郷に居を構えた文人は20人を越える。

また近年評価を上げてきたのが古くからある日本式旅館だ。これは外人観光客によっても見直されて来たらしいが、日本旅館独特の佇まいとサービスが人気らしい。最近は英会話の出来るスタッフもいるというから海外から来る出版社の人達にも紹介してあげれば喜ばれるのではないかと思う。

坂が多いのは先に述べたが、本郷だけでもその数は40くらいあるそうだ。また歩ける範囲で言えばその名所旧跡の多さは驚くほどだ。東大の赤門をはじめ本郷の大楠(本郷一丁目)や小石川後樂園、根津神社、旧岩崎邸庭園、湯島天神も近い。鷗外、漱石の小説の舞台も多い。これらは何れもお勧めの散策スポットだ。

歩き疲れたところで立ち寄るならと食べどころを



東大赤門



ぎおんにて筆者

編集長より皆様へ

新連載「我が社・わが街」への原稿をお寄せください。

皆様の会社と街について、またお勧めのスポットやお店について、どんなことでも結構です。楽しいお話しをお待ちしております。

紹介したい。まずバリエーションを楽しむのなら本郷郵便局横の「森川町食堂」が値段も手ごろだ。カレーの店は多いがなんといっても伝統の味なら東大正門前の「万定」、今も活躍するレジスターは大正時代の購入時には家一軒が立つ程の値打ちだったという。これは一見の価値がある。ソバ屋がいいなら正門より少し農学部寄りの「あさひ屋」。夕方になって酒が恋しくなれば新鮮な肴が楽しめる「ぎおん」、「白糸」（共に本郷三丁目交差点近く）などをお勧めしたい。

私は40年近く会社に通い続けたが、その地が本郷であったことを素直に喜びたい。この長く伝統が

生き続ける街で、それはほんの僅かな時代を過ごしたただけかもしれない。ここ本郷が特別な地域でもなく、谷中や千駄木のように空襲の被害を免れたわけでも無い。バブル経済時には銭湯は無くなり長屋もなくなった。東京大学に対抗するかのように本郷通りには十階を超えるビルが立ち並ぶようになった。それでも本郷には様々な有形無形の伝統が残っているし引き継がれていると思う。それはこの地で生活し、毎日の糧を得ようとしている人が大勢いることが証だ。我々がそんなものを微力ながら守ろうとするならばこの街の歴史に小さな足跡を残すことが出来るのかもしれない。

お知らせ

■ 新入会員紹介(敬称略)

正会員

株式会社 フランス図書

会社代表者 近藤 文智

会員代表者 高鷲 大介

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-11-15

TEL. 03-3226-9011 FAX.03-3226-9012 Web: www.francetosh.com E-mail. frtosh@vluce.ocn.ne.jp

会社紹介: フランスを中心としたヨーロッパの書籍や語学教材、AVソフトを輸入・販売しています。人文科学系の学術書をはじめ、アートやモードなどのビジュアル書、料理書、さらには絵本といったジャンルを扱っております。ご質問・ご要望等ございましたらお知らせください。

有限会社 エーケーブックス

代表者 阿部 睦

〒300-1235 茨城県牛久市刈谷町2-172-11

TEL. 029-872-3484 FAX. 029-830-7403 Web: http://akbooks.jp E-mail. akbooks@mbr.nifty.com

一般社団法人 学術著作権協会

代表者 齋藤 毅

協会代表者 小野 春夫

〒107-0052 東京都港区赤坂9-6-41 TEL. 03-3475-5618 FAX.03-3475-5619

個人会員

マーク・グレシャム

■ 協会事務所は下記に移転いたしました。

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1-13-4F (株)MHM内

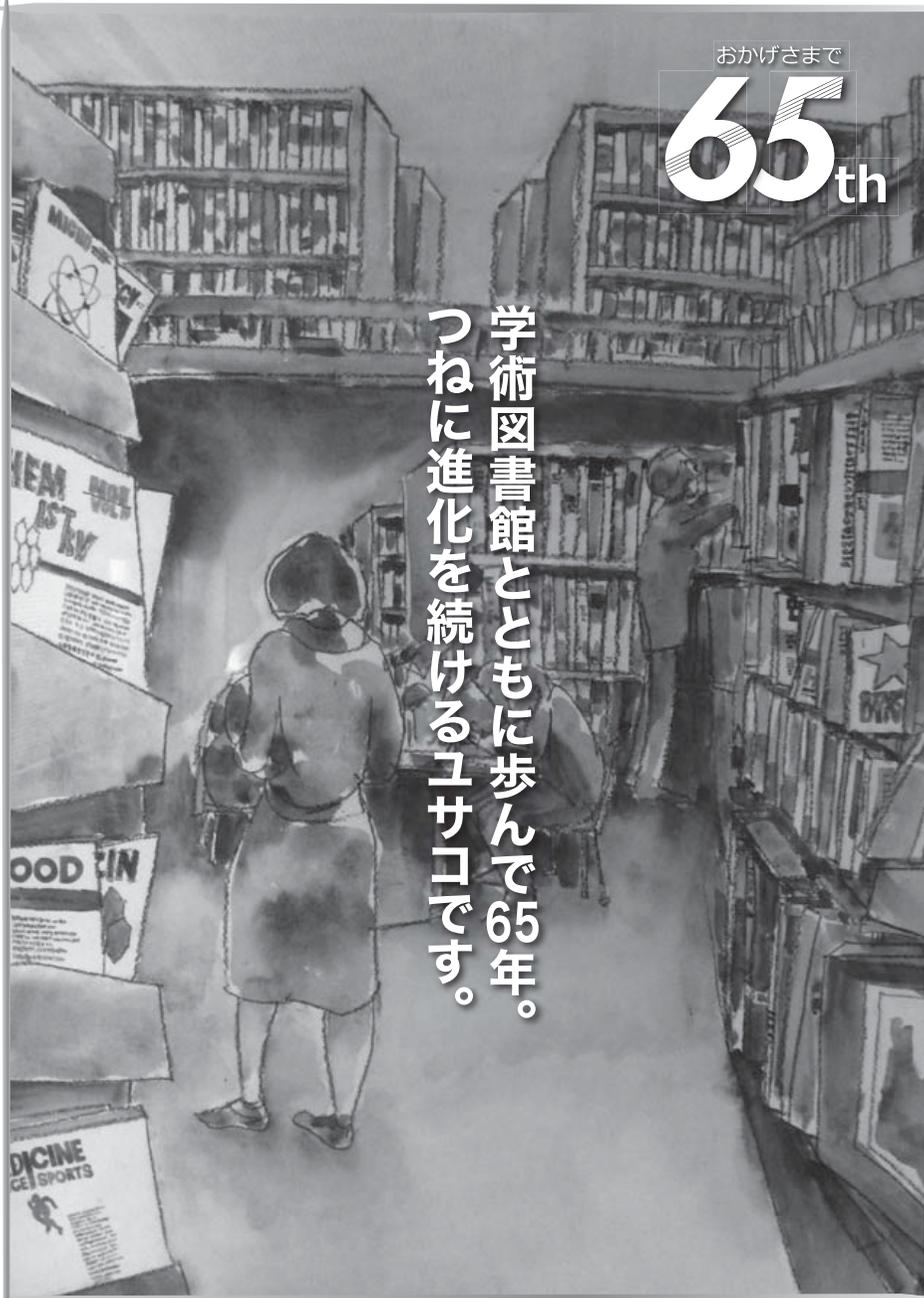
Tel:03-3518-9631 Fax:03-3518-9523 E-mail: office@jaip.jp Web: www.jaip.jp

■ 来年の新年賀詞交歓会

例年年初休暇明けの金曜日に行っていましたが、今回は事情により木曜になります。ご注意ください。

2016年1月7日(木) 午後6時 於国際文化会館

を予定しております。近くなりましたら文化・厚生委員会よりご案内いたします。



おかげさまで

65th

学術図書館とともに歩んで65年。
つねに進化を続けるユサコです。

PROGRESSIVE CHANGE IS OUR WAY OF LIFE

創業 1950
ユサコ株式会社

<http://www.usaco.co.jp/>

日本洋書協会会報 vol.49 No.6(通算537号) 発行日2015年11月1日 編集者 松野 夏生

発行所 日本洋書協会 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1-13 (株)MHM内 TEL 03-3518-9631 FAX 03-3518-9523
URL:<http://www.jaip.jp> E-mail:office@jaip.jp